

## 天台実相論における諸法の分析

研究生 渡辺 隆明

今日の思想状況を打開するものとして、仏教思想に注目が集まっている。天台実相論は今日の思想状況を打開するための大きな役割を担うだろうと考えられる。今日の思想状況を打開する時、大乘仏教、特に天台教学で示される「法」は、西洋思想・西洋哲学において長く主流であった実体論的世界観を拒否し、関係主義的な世界観の鍵となる概念である。

現代の思想状況は、現代社会が抱える様々な困難とともに危機的な状態にある。この状況の根本は、一言でいえば、近代合理主義をもたらした西洋思想にある。人間理性への過信と、理性に基づく要素還元主義的な世界観の妄信である。したがって我々が受け入れてきた西洋思想を批判検討する必要がある。とりわけ、西洋思想とは別種の問題をもった仏教の立場からの批判検討は有意義である。発表では、仏教思想のうち、特に天台実相論を扱った。

西洋思想と天台実相論とを比較検討するためには、天台実相論の中で西洋思想を位置づける必要がある。そのための作業の一環として、発表では、仏教において存在者を意味する法が、天台実相論においてどのような意味づけがなされているか分析を行った。

天台教学では、根本原理の一つとして、「諸法実相」が

示される。諸法実相は、「諸法の実相」とするのが通仏教の読み方であるが、天台教学では諸法は実相であるとするすなわち、天台宗においては、「諸法は実相なり」と読む（石津照璽（一九八〇）『天台実相論の研究——存在の極相を求めて——』創文社、一五三頁）。

では、法はどのようにして観得されるのだろうか。

諸法実相を観得するための方法として円頓止観や一心三観が示される。円頓止観の実践は、実相と法界を観ずることを旨としている。『摩訶止観』で明らかにされる円頓止観においては、空・仮・中の三諦の円融すなわち、即空・即仮・即中が目指される。空・仮・中は三諦として、天台において重要視されている。これは、龍樹の『中論』の「観四諦品」第二四にある二諦説から、空・仮・中の三諦説を見出したものである。これらを観ずるものとして空観・仮観・中道観がある。空観は、諸々の対象物等の実体を否定するが、否定のみなので、ニヒリズムに陥る。仮観は、空観によって陥ったニヒリズムを否定する観法である。そして中道観とは、そのニヒリズムをも否定する観法である（田村芳郎・梅原猛（一九九六）『絶対の真理（天台）——仏教の思想五』角川書店）。こうして実体論的世界観を批判し、新たな世界観を示すのだ。

以上のように、天台教学における実相としての諸法が、実体的な区別を示すものではなく、空・仮・中の性質を備えるものであり、現実活動への反省を促すと同時に、現実活動が価値あるものだと確認された。